

# ホーンテッドマンション (THE HAUNTED MANSION)

2004(平成16)年3月5日鑑賞(東宝試写室)



監督＝ロブ・ミンコフ／出演＝エディ・マーフィ／テレンス・スタンプ／ナサニエル・パーカー／マーシャ・トマソン／ジェニファー・ティリー／ウォーレス・ショーン／ディナ・ウオーターズ／マーク・ジョン・ジェフリーズ／アリー・デイヴィス（ブエナ・ビスタ・インターナショナル（ジャパン）配給／2003年アメリカ映画／88分）

……『ホーンテッドマンション』はディズニーランドの人気アトラクション。確かにこのマンションの豪華さは驚きだが、日本人にはちょっと馴染みが薄い(?)この大きなお屋敷の売却をテーマとして登場する主人公は、不動産屋の夫婦とその可愛い2人の子供たち。そして、このお屋敷をめぐる、昔の悲しい「恋物語」が展開される。呪われたお屋敷に登場する幽霊たちも個性豊かで面白いが……？

## ホーンテッドマンションとは？

ホーンテッドマンションとは、ディズニーランドにある、有名なお化け屋敷のアトラクション。パンフレットによれば、アトラクションのホーンテッドマンションが最初に誕生したのは、1969年8月、カルフォルニアのディズニーランドにおいてのこと。

そしてその後、各地のディズニーランドに誕生し、東京ディズニーランドでは、1983年にオープンしたとのことだ。しかし、ディズニーランドに行っていない私は、残念ながらこのホーンテッドマンションの意味そのものを知らなかった。ちょっと時代遅れか……？

## 映画のお屋敷のセットはお見事！

ディズニーランドの「ホーンテッドマンション」から、ヒントを得てこの映画がつくられたとのことだが、そのお屋敷の豪華さはお見事！ 玄関ホール・食

堂・居間・客室等の各部屋や、暖炉・ソファ・テーブル・イス・ベッド等の家具類、そして絵画・置物等の装飾品は、何から何までびっくりするような豪華さだ。

映画のストーリーはわりと単純だし、映画の舞台は、はじめから終わりまでほとんどこのお屋敷の中だから、じっくりとこのお屋敷の豪華さを楽しもう。この映画自体も半分、それを売りモノとしているのだから。

## 主人公は陽気で前向きな不動産屋さん

この映画の主人公ジム（エディ・マーフィ）は陽気で前向きな不動産屋さん。美しい妻のサラ（マーシャ・トマソン）もこの仕事を手伝っている。

ジムは家族思いだが、つい仕事に一生懸命になりすぎて、家族サービスがおろそかになりがち。そのためサラから時タイヤミを言われている。子供は13歳の娘メーガン（アリー・デイヴィス）と10歳の息子マイケル（マーク・ジョン・ジェフリーズ）の2人。

こんなジムがこのホーンテッドマンションと関わることになったのは、お屋敷の執事のラムズリー（テレンス・スタンプ）から、サラを名指しでこのお屋敷の売却を頼まれたため。

ご指名は、なぜかサラ1人だったのだが、週末の家族旅行を約束させられたジムは、その家族旅行のついでに、20分だけこのお屋敷の下見とごあいさつに。それがすべてのトラブルの発端となった。

## お屋敷売却の事情

このお屋敷の主人はエドワード（ナサニエル・パーカー）。もちろん自分が購入したり、建築したのではなく、先祖代々受け継がれてきたものだ。しかし、相続税の高い日本ではこんな高額なお屋敷をスンナリと子孫が受け継いでいくことは不可能。相続税を払うためにお屋敷を「切り売り」して……。というお話はよくあることだ。

お屋敷の売却を申し出たのは執事のラムズリーだが、この映画では、そういう「現実的な」事情に基づくものではない。お屋敷を売却したいということで、サラを名指しし、しかも1人だけでお屋敷に来るように言ったが、さてそのホント

の理由は？

### 悲恋物語のトバッチリ？

タネを明かして申し訳ないが、この執事のラムズリーがワル。といっても、本物のワルではなく、当主を思う気持から出たもの。

純真無垢な当主エドワードは、身分違いの女性エリザベスと大恋愛をし、結婚を望んだ。しかし、そんな身分違いの結婚は不幸のもとで、絶対にダメと思ったラムズリーはこの結婚をやめさせようと策動し、挙げ句の果てにエリザベスを毒殺してしまった。こんな恨みつらみの展開の中、悲しみにくれた当主は天国に行くことができず、多くのゴースト（幽霊）たちとこのお屋敷にずっと住みつづけているわけだ。

ところがそんな時、ラムズリーはエリザベスそっくりのサラを見つけたため、そのサラをサラってきて（？）、今やゴーストとなっている当主のエドワードと結婚させようとした。不動産屋のサラを呼び出すには、お屋敷を売却したいので、と言えばオーケー。そう考えたわけだ。

しかし、そんな企み（？）とは知らずに、お屋敷の売却の仲介に乗り気になった、サラの亭主ジムは、おかげで変なトバッチリを受けることになってしまった。

### 次々と展開されるお化けのストーリーは？

サラはエドワードと2人で一見楽しげにお屋敷の中を散策し、昔（？）を思い出していた……。しかしジムと子供たちは別行動に追い込まれた上、次々とお化けたちとの格闘を余儀なくされることに……。広い広いお屋敷の中での、これら数々のストーリーを見ていると、お化けのつくりの精巧さに感心させられたり、思わずアッと驚かされたりするものの、所詮はつくりもの。こういう映画は、あまり真剣になってはダメ。適当に楽しまなければ……。

### 仮面舞踏会のシーンはもったいない……。？

映画は、冒頭の字幕と美しい音楽が流れる中、仮面舞踏会のシーンが幻想的に映し出される。これはもちろん、華やかで楽しかった時代にお屋敷の中で開催さ

れた仮面舞踏会。このシーンを撮影するについては、俳優はもちろん衣装や飾りモノだけでも大変な費用。ところがこのシーンは最初に少しと途中で少しだけしか使われていない。

せっかく豪華さを売りモノにしている映画なのだから、ガイコツやゾンビなどの化けモノばかりを出演させるのではなく、こんな華やかで楽しい時代のお屋敷における美しい恋物語をもっと強調すれば……と思うのだが。

## 不動産屋の「しゃべり」は万国共通？

この映画の主人公ジムは不動産屋だから(?)よくしゃべる。真面目な営業も一生懸命やっているが、不動産屋特有の「早く契約しないと売り切れますよ」という「インチキ」めいた勧誘テクニックも……。「優秀」な不動産屋のしゃべりのうまさは万国共通か……?と思わず苦笑い。

ジムファミリーがこのお屋敷の下見に行き、食事をすることになり、挙げ句の果てに泊まることにまでなったのは、豪雨のせいもあるが、結局は、ジムの商売熱心が原因。

その意味では、エドワードに妻のサラを取られそうになったのは、ジムの自業自得かも知れないが、しゃべりだけでなく、ジムがこの映画で示す夫婦愛、家族愛、そして化けモノと立ち向かう「勇気」は立派なモノ。

それはそれとして評価しつつ、半分マンガみたいな映画として、それなりに楽しまなくちゃ……。

2004(平成16)年3月6日記